二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第一章　二人の捜査官　006
第二章　穢れの捜査　039
第三章　監獄島の勤務時間　073
第四章　トイレと運動とまたトイレの時間　105
第五章　島の日常　147
第六章　洗脳終了　190
終章　それからの話　234

登場人物紹介

Characters

西園寺涼子（さいおんじりょうこ）

公安調査庁の捜査官。監獄内で連続する不審死を調査するため、看守と行動を共にしながら事件を追う。

檜山沙紀（ひやまさき）

涼子と同じ公安調査庁の捜査官。涼子よりも先に監獄内に入り、囚人の側から事件を追う。

柏木水斗（かしわぎみずと）

監獄島で看守を務める涼子の幼馴染み。今回の事件発生を知らせてきた。

成川孝則（なるかわたかのり）

元刑事で、犯罪に手を染めたため涼子に逮捕され、収監されている。

柊 隆二（ひいらぎりゅうじ）

監獄島の監長を務める中年体質のいやらしい男。

『第二章　穢れの捜査』より　その１

いつも通り脂汗でびっしょりと顔を濡らしながら、呆れたように首を傾げる。明らかに不服を持っているような態度だった。

「何か不満でも？」

「……い、いや……別に……」

上から目線で言葉を返す。すると男は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながらも頷いた。こういう輩に命令するには、立場を強調した方がいい。

「分かって頂ければ結構。私としてもあまり時間は掛けたくありませんから。さっさと終わらせてしまいましょう……そういうことですから、服を脱いで頂けますか？」

「え？　ふ、服を⁉　な、何を言ってるんだ⁉」

驚きに柊は目を見開く。再び口をつくのは怒りの言葉。この態度がまた癇に障った。身体検査と言っているのだから、服を脱ぐくらい当たり前のことではないか。

「早くして下さい。貴方が何を隠しているのか、調べるにはそうするしかないでしょ」

冷たい言葉を向けながら、ハァッと大袈裟に溜息をついてみせる。再び立場を強調する行動だった。冷たい空気が一瞬室内に広がっていく。

「……わ、分かりました……」

この空気に耐え難いものを感じたのか柊は頷くと、徐にスーツを脱いだ。次にネクタイ、Yシャツそして下着と順々に脱いでいく。たっぷりと贅肉が詰まった下腹が晒された。ぶよぶよと無駄な脂肪に覆われた肉体が、涼子の視界に映る。

とても綺麗な肌とは言い難い。胸元に小汚く生えた毛に、不快感を覚える。あまり見ていたいものではなかった。

（私は何をやってるの？　でも……捜査はしないと……）

柊の脱ぎ散らかしたスーツを手に取って調べる。プンと漂う不快な加齢臭を嗅ぎながら、ポケットの一つ一つをチェックした。ただ、当然何も出てはこない。こんな捜査で証拠が発見できる筈がなかった。正直、心のどこかには無意味さに気づいている自分もいる。だというのに、行動を止めることはできなかった。

「何もありませんね。仕方ない。ちょっと失礼しますよ」

涼子はスーツを近くのデスクに置くと、今度は上半身裸の柊に近づいていき、彼の身体に腕を伸ばした。掌に湧き出る体液で濡れた、不快な肌の感触が伝わってくる。吸い付くような感触に、女捜査官は眉を顰めた。

「な、何をっ!?」

流石に柊が驚きの声を上げる。が、涼子は彼の言葉などまるで無視して、その白く細い腕で醜い身体を撫で回した。

『人の身体ってのは、興奮すると変化する。例えば興奮することで昔の傷が浮かび上がってくる……なんてことだってあるだろ？　だから、もしかしたら監長の身体に残された証拠が浮かび上がってくるかも知れない。試してみる価値はあるって』

指先で男の胸毛を搦め捕りながら、涼子はここに来る前に水斗から聞かされた言葉を思

い出す。
『汗の味で嘘をついているのかいないのかも分かるらしいぞ』
そう語る彼の眼は真剣だった。
（あまり聞いたことのない話だけど……事件を早く解決する為だし……）
この島に来て、捜査をしているのは、それが仕事であるからである。ただ、同時にいくら囚人とはいえ、人が死ぬのを見たくないという気持ちもあった。事件の首謀者がいるのであれば、それを止めなければならない。
（これはやるべきこと。やらなくちゃいけないことよ）
涼子は自分自身に強く言い聞かせると、男の身体に顔を近づけた。
「あ……さ、西園寺さん。は、鼻息が……」
柊が顔を歪める。その瞳に驚き以外の感情――牡の劣情を見て取ることができた。
「こ、これは捜査です。黙っていて下さい」
脂汗に塗れた表情が不快この上ない。涼子は彼には一瞥を与えることなく、その脂肪で膨らんだ親爺の胸に舌を伸ばした。
ぴちゅっ。ちゅぶ……くちゅぅ……。
舌先で男の乳首を舐める。ぷよっとした柔らかさが舌先に伝わってきた。
（うあ……し、塩っぱい……）
更に感じるのは男の体液――どこか塩気を含んだ牡の味。

「うおっ！　な、何をっ⁉」
唐突な行動に柊は再び声を上げる。流石に不気味なものを感じたのか、身を捩って男は逃げようとした。
涼子はそんな監長の腰に手を回し、彼の身体を拘束する。
「んちゅ……ぺちゅ、くちゅ……う、動かないで。こ、これは捜査なんですから……」
「そ、捜査って……うおっ！」
ちゅぶっ！　ちゅくくく……ちゅるる……。
一瞬、柊も納得いかないような様子を見せたが、開いた口で胸を吸った途端、そんな疑問はどこかへ飛んでいってしまったというような、愉悦の表情を見せた。
（な、なんて顔……こ、これが捜査だって本当に分かってるの？）
反応に腹立たしささえ覚える。が、だからといって男を舐める舌を止めはしない。心の中に広がっていくのは嫌悪感ばかりだというのに、何度も男の身体にキスをしてしまう。
ちゅっちゅっと口付けし、舌で胸から下腹までを撫で摩る。顔を離すと男の身体と唇の間に、透明な粘液の糸が伸びた。
「ふぅ……ふぅ……ふぅ……」
いつしか涼子の口は荒い息を漏らし始める。ただ舐めているだけだというのに、何故だか身体が熱くなっていくのを感じた。下腹部がむず痒くなっていく。
（……なんなのよ。分からない。こんなことしたって何も分からないじゃない）

同時に苛立たしさも湧き上がって来る。凄まじい嫌悪に耐えながら、それでも捜査の為だと、男の身体を舐めているというのに、味から相手の考えを読み取ることなどまるでできない。

「あ、貴方は……んちゅ……ふちゅぅ……こ、今回の不審死が……はぁはぁ……作為的に起こされたもの……事件だ、と……考えていますか？　ちゅっちゅぅ……」

だから涼子は柊に口愛撫を行ないながら、尋問を開始した。黙って舐めていてもどうにもならない。

「……か、関係ないでしょ？　あいつらは勝手に死んだんです。理由なんか知ったことじゃありません。お、そこがいいです」

質問を受けた柊は、あっさり事件性を否定する。特に言葉に詰まった様子も見受けられなかった。舐められる快楽に蕩けたような表情を浮かべている。尋問に対する動揺もないのか、汗の味に変化もなかった。

（こ、これじゃあ埒が明かない。何とかしない……ん？　何？）

変化のなさに焦りを覚える。そんな時、胸元辺りに硬い何かが押し付けられていることに気づいた。反射的に視線を移すと、柊の下半身が押し付けられている。密着しているのは、ズボンを持ち上げる程に勃起した肉棒のようだった。ゆっくりと腰が前後に揺れている。

（こ、こんな汚いものを！　いや、でも……よく考えれば……）

この行為に最初に浮かんできたのは怒りだった。が、すぐに涼子は感情の乱れを抑え、

冷静に、自分でも気づかぬ異常なことを考える。ただ身体を舐めるよりも、直接肉棒に触れた方が、相手の考えをよりダイレクトに探れるのではないか――と。

「……ちゅぷ……ズボンと下着を脱いで下さい。下半身も調べます」

そう考えた後の行動は素早かった。何の躊躇もなく、柊に命じる。これを受けた監長も「おおっ！」と歓声を上げる。

その様子に嫌悪感を覚える涼子の前で、監長はあっさりと下半身を晒した。

（……き、汚い）

ズボンから解放された柊の肉棒は、こちらが想像していた以上に醜く、汚いものだった。半分程皮を被ったペニス。ツンと咽せ返るような臭いが漂ってくる。肉先からは半透明の液体が漏れ出していた。垢に塗れているかのように黒い肉棒が、ビクビクと震えている。触ることすら躊躇われる。それでも涼子は肉棒に顔を近づけていった。味を見なければ、捜査は継続できない。そんな強迫観念のようなものが、女捜査官を動かす。

（こ、こんなことで分かる筈ない……ないと思いたいけど……）

もしかしたらそんなこともあるかも知れない。心のどこかでそう思うと、職務に忠実な涼子は止まることができなかった。

ちゅく……くちゅぅ……。

口唇をペニスに密着させる。肉先粘液で唇が濡れた。

「……に、苦い……」

思わず声に出してしまう。味覚を痺れさせるような味に、女捜査官は眉間に皺を寄せた。それでも、行為自体は続行する。まるで好きな男に愛撫でもするかのように、柊の前で跪きながら、ぴちゅぴちゅと音を立てて肉棒を舐め始めた。

ちゅく、ぴちゅぴちゅ、ちゅぴゅりゅぅ……。

「うおあっ！　た、堪らん。堪りませんぞ！」

醜悪な男の歓喜が聞こえる。涼子は敢えて聞こえないふりをしながら、舌先で肉先秘裂をなぞり、肉茎を根元から舐め上げていった。一舐めするごとに、粗末なペニスがビクビクと何度も跳ねる。そこだけが別の生き物のように舌を蠢かせ、亀頭部を何度もなぞる。先端部のワレメを穿るように、カリ首を締め上げるように。溢れ出る唾液が肉棒を濡らし、ヌラヌラと不気味に輝いた。

「んちゅ、ふちゅ……んも……くもぉっ！」

艶やかな唇を開き、遂には不浄な肉棒を口腔に迎え入れる。全身に鳥肌が立つのではないかという程の怖気を感じた。だが、女捜査官はそれでも止まることなく、咥えた男根に舌を絡ませていく。口腔粘膜と肉先から溢れる先走り汁が絡み合う。混ざり合う体液同士が、口の中で糸を引いていった。

ちゅずっちゅずず……じゅずずるるぅ……。

「ふむっ！　ふむぅっ！　んちゅっ！　にが……んっんっんっ！」

伸ばした舌で皮を捲る。包皮を捲り上げられた肉亀頭には、ベッタリと恥垢が溜まって

いるのが分かった。更なる悪寒を感じ、一瞬涼子は身体を震わせながらも、じゅるじゅると肉棒を吸引しつつ、恥垢を舌先で舐め取っていく。舌を動かすたび、下腹部に熱が広がっていくのが分かった。フーフーと鼻から荒い息が漏れる。

同時に上目遣いで柊を見つめると、

「ふぐ……んぐんぐ……あ、なたたふぁ、な、なりかふぁをしっへまふか？」

肉棒を咥えたまま質問した。口腔を塞がれた状態では、どうしてもくぐもった声になってしまう。自分でもそれは分かっているのだが、味の変化というものに気づく為にはこのままでいなければならない。

「な、成川ですか？　さ、さぁ……？」

幸い何とか聞き取ってはくれたようだった。ただ、思いっきり首を傾げられてしまう。先程同様、本当に覚えがないように見えた。

（あ、味は？）

じゅじゅじゅじゅじゅじゅぅっ！

タラタラと口端から唾液が垂れ流れる。そんなものは気にせず、涼子は頬を窄めて肉棒を吸った。だが、やはりというか勿論というか、味に変化などありはしない。

「んぇえええっ！　げほっ！　げほぉっ！」

結果、あまりの苦味に肉棒を口腔から解放し、唾液を飛び散らせながら何度も咳き込むという形になってしまった。

「だ、大丈夫ですか？」
柊が慌てたような声を上げる。調子に乗りすぎたとでも思ったのだろうか？
「んごほっ。げはっげはぁっ……はぁっはぁはぁ……わ、わたっしは、だ、大丈夫です」
正直この男に心配されるような言葉を掛けられるのは屈辱だった。だから呼吸を整えながら強がって見せると、涼子は素早い動きで彼の身体を捕らえ、そのまま椅子に座らせた。流石に「な、何をするんですか⁉」と柊も少し非難交じりの声を上げる。
（こ、こうなったら直接身体で調べるしかないわ）
だが涼子は抗議を無視し、柊の前でスカートの中に手を入れると、ストッキングとショーツを、何の躊躇もなく下ろした。
先程までの口奉仕に、知らず知らずのうちに自分でも興奮してしまっていたのか、下ろしたショーツと秘裂の間に愛液の糸が伸びる。ピンク色の肉襞は濡れそぼり、ゆっくりと呼吸するように蠢いていた。
（セックスなんて久しぶりだけど……ちゃんと濡れてるわね。これなら大丈夫か。よかった。捜査に支障はないわね）
「あ、さ、西園寺さん……い、いいんですか？」
この事態に柊の顔に期待の色が燈る。
「……」
（これは捜査。徹底的にこの男が何を知っているのか、私はそれを調べなくちゃいけない。

だから仕方がないことなのよ）

男の言葉を敢えて無視し、女捜査官はスカートも捲り上げた。繁みに隠された陰部が晒される。涼子は手を伸ばし、自分自身の指でクパアッと陰唇を左右に押し開くと、自ら椅子に座る男の上に跨り、そのままゆっくりと腰を下ろしていった。

ちゅぐ……じゅじゅじゅじゅぐぅ……。

「ん……んぁあっ！　は、挿入ってくる……あっあっあっ！」

肉孔に密着したペニスが、そのまま肉襞を左右に押し開いて膣中に挿入される。下腹部に異物感が広がっていくのが分かった。カリ首に膣壁を擦り上げられ、思わず涼子は甘美を含んだ声を上げた。ここ暫く味わっていなかった肉欲の快楽が、全身に広がっていく。

「ふぁ……ふーふーふー」

口から漏れる吐息を止められない。肉棒を咥え込んだ蜜壺からは、ジュワッと愛液が溢れ出し、男の太股を濡らした。

「お、す、凄い。さ、西園寺さんの襞が私のちんこに絡みついてくる。おっ、す、凄い締め付けだ！　襞の一枚一枚が、うねるように動いてますぞ！」

柊の口からは感嘆が漏れる。

（い、言わないで。黙ってい、なさい……）

自分の身体に関する感想に、涼子は羞恥を覚えて顔を真っ赤に染めた。同時にどうしても感じてしまう恥ずかしさを抑え、誤魔化す為に、自ら腰を振り始める。とっとと終わら

せてしまえば、その分苦しみからも早く解放されると考えたからだ。
じゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっ！
「す、少し、お、大きいわっね。ん、んぐっ！」
油断すると声が出てしまいそうだった。それを抑える為、わざと冷静な声を出してみつつ、柊の肩に手を回しながら、リズミカルに腰を前後に動かす。捲れ上がったスカートから覗く尻が、淫猥に蠢いた。腰をグラインドさせるたびに、甘く痺れるような快楽が肢体を駆け抜ける。陰茎に膣壁を押し広げられるたび、全身が弛緩した。
「ああ、堪りません。最高です」
愉悦に沸きながら、柊が顔を近づけて来る。一瞬何をするつもりか涼子には分からなかったが、次の瞬間――
ちゅぶっ！　くちゅぅ……。
脂ぎった親爺の唇が、女捜査官の口唇に重ねられた。不意を突かれた涼子にはどうすることもできず、舌の侵入まで許してしまう。
「んふっ！　むふっ！　ら、らにふるふぉっ！　き、きふをゆるひては……んんん」
口腔に入り込んできた異物が、舌に絡みつく。ねっとりと互いの粘液が混ざり合い、男の唾液が口腔に流れ込んできた。ちゅうちゅうと唇を吸われる。互いの唾液を交換しあう作業。漏れ出た粘液が、顎に流れ、胸元へと垂れ流れていった。スーツにベトベトとした染みがつく。

『第二章　穢れの捜査』より　その２

そんな姿に男の一人が笑う。
「だ、だふぁれっ！　こ、こほやろっ！」
口を上手く利くこともできないけれど、男を罵る。いいように嘲笑われることなど我慢がならない。が、怒声の最中にもピストンは行なわれ、唇を捲れ上がらせるという情けない顔を晒すことになってしまった。
「お、おぼっ！　んごんごっ！　おぼえへろっよきしゃまらぁっ！」
喉奥を突かれることで込み上げてくる吐き気に耐えながら、唾液を垂れ流しつつ、それでも男達を睨む。
「覚えてろか……。その状況でそんな口を利けるんだから大したものだ。だが勘違いするなよ。俺達のことを覚えておくのはお前の方だ。ククク、お前の身体に俺達のことを刻み込んでやるよ」
視線を涼しい顔で受け止めながら、成川は媚肉を指先で愛撫する男に、目線で指示を下した。すると男は愛撫を止め、指の代わりに肉先を沙紀の秘裂に密着させる。ねちゃりっと粘液同士が擦れ合う音が聞こえた。
「――っひ！　や、ひゃめっ！　ひゃめろふぉっ！　んぼっ！　おっおっおっ！」
聡い女捜査官は、すぐに男が何をしようとしているのか理解する。この瞬間、流石の沙紀も、その顔に恐怖の色を浮かべた。ただ、制止の声も激しさを増した口腔陵辱に掻き消されてしまう。

（い、嫌だっ！　こんな、こんな連中に犯されるのは嫌だぁっ！）
寒気すら感じた。肉棒を咥え込まされたまま、唯一自由に動く首を左右に振る。ただ、そんな態度を見せたところで、男達が止まる筈もなかった。それどころか怯える沙紀の姿により肉棒を硬くし、そして――
じゅずっ！　ぶじゅじゅじゅじゅっ！　ぶぢぶぢぶぢぃっ！
「んぎぃいいいいっ！」
何の容赦もなく、ペニスが女捜査官の秘裂を左右に押し広げた。異物が胎内に侵入してくる。未だまともに濡れてもいなかった陰部への侵入。一瞬で膣奥まで肉棒は突き進み、処女の証を簡単に引き裂く。全身を包み込む破瓜の痛みに、獣のような悲鳴を上げた。
「うはははっ！　おい、血が出てるぞ。何だこいつ、やっぱり処女だったのか？」
「おいおい、この年で処女はないだろ！」
膣口から垂れ流れる破瓜の血を見た男達がゲラゲラと笑う。こちらを馬鹿にする、蔑んだ笑いだったが、今の沙紀の耳には、その笑い声は届かなかった。
（あ、ああ……お、犯された……男なんかに……男なんかに犯されたぁ……）
再び眦に涙が溢れ出す。先程流れた苦しみの涙とは違う――絶望の涙だった。
「おいおい、泣いてるぞ。そんなに女になれて嬉しかったのか？　可愛い奴だな。よしよし、たっぷり可愛がってやるぞ」
が、その涙すら男達を喜ばせてしまう結果になる。強気な女を泣かせていることに興奮

した男は、容赦なく処女を失ったばかりの蜜壺に対して、激しいピストンを開始した。
じゅごっじゅごっじゅごっ！
「あぎっ！　ふぐっ！　ふごーふごーっ！　ぶえっ！　うええっ！　どま、どまっで！　いだ、いだいからどまっでぇっ！」
痛みに身体が震える。まともな思考力を保つことなどできなかった。相手が薄汚い男達だと分かっていても、懇願せざるを得ない。
先程まで純潔だった肉襞が、巨棒に絡まれ、外側に捲れ上がる。喉奥を肉先で突かれ、鼻の穴から圧力で唾液が噴き出した。シャツは捲り上げられ、乳頭には男達が食いついている。左右の乳首を舌で巻き取られながら、激しく吸引された。
「ち、ちっくび、んぶっ！　だむえぇっ！　は、はなっへ！　ころっふ、ころふぞぉっ！」
じゅずっじゅずっと身体を揺すられ、涙を流しながら、男達を威嚇する。
「おいおい、捜査官の台詞とは思えないな。まったく……これは罰を与えなくちゃいけないか？　おい」
傍でこの光景を見ているだけだった成川が、男達に再び指示を飛ばす。すると男達は更に腰の動きを激しいものにしてきた。性玩具を扱うように、肉先が上下二つの穴を塞ぐ。この行為に、自然と口腔からは唾液が溢れ、肉壺に愛液が分泌された。一突きごとに硬さと大きさ、熱気を増していく肉棒に溢れ出す体液が絡みつく。
「おいおい、濡れてるじゃねえか。何だお前？　もしかして犯されて感じてるのか？」

「ぢがっ！　ぢがっう！　かんじてなんっか――ぶべっ！」
感じてる筈がない。こんなモノは穢いだけ――必死に沙紀は否定する。否定するのだが、
（ど、どうして？　な、何でこんな、のでぬ、ぬれ……濡れちゃうの？）
溢れ出す愛液を止めることはできなかった。
濡れたことで膣中をよりスムーズに肉棒が摩擦する。自然と媚肉はペニスへと絡みつき、ギュウギュウと陰茎を締め付けた。
「す、すげぇ締まりだ。たまんねぇ！　も、もう限界だ！」
男達が快楽に歪んだ表情を見せる。いくら男を避けてきたからとはいえ、彼等の言葉の意味が分からない程、沙紀は子供ではなかった。全身から一瞬で血の気が引いていく。
「ひゃ、や、やら……おくっ！　そ、れふぁ、やっ！」
瞳に浮かぶのは恐怖の色だった。
びゅぼっびゅぼっ！　ぐじゅっ！
男達はその視線を無視する。まるでこちらの言葉など聞いていないようだった。ただ己の快楽を満足させる為だけに腰を振る。
「射精すぞ。たっぷり膣中に射精してやるぞ」
「俺は口の中だ！」
本能に塗れた瞳。発情期を迎えた獣のように男達は腰を振り続け、やがて喉奥に、膣奥に、肉先を叩きつけてきた。刹那、胎内から身体が焼けてしまうのではないかと思う程、

肉棒の熱気が高まり、破裂しそうな程に亀頭が膨れ上がった。そして――
びゅぶばっ！　どっぴゅどっぴゅどっぴゅ、どぴゅるるるるっ！
「んべぁああっ！　んぼっ！　んぼぉっ！　おっおっおっおおぉっ！」
肉先から多量の白濁液が沙紀の胎内に向かって放たれた。ビクビク痙攣しながら、熱液を撒き散らす。蜜壺が男汁に蹂躙され、小さな口腔に入りきらない白濁液が、口端と鼻からブピッと噴き出した。
「こほっ！　ほごごっ！」
性感など感じていない。ただ苦しみだけが沙紀を襲う。ブルブルと全身が細かく震え、ピンッと手足が伸びた。その上、追い討ちを掛けるように、乳首を吸っていた男達まで射精を始める。まるでシャワーのように、沙紀の全身に白濁液が降り掛かった。
じゅぼっ！　じゅずるぅ……。
「おっ！　おええっ！　うげぇっ！　げほっ！　げほぉっ！　う、ま、不味い……苦い……あ、あぢゅい……」
やがて肉棒が引き抜かれる。途端に女捜査官は何度も咳き込み、口腔に放たれた白濁液を吐き出した。ただし、仰向けに寝たままなので、吐いた牡汁は自身の顔にグチャリと広がることになる。同時に膣口からも白濁液が大量に流れ出した。破瓜の血と混ざり合い、ピンク色に染まっている。伸びた手足がヒクヒクと痙攣を繰り返した。
「はぁはぁはぁ……う、うう……よ、汚された……こ、こんな奴等に……」

『第五章　島の日常』より

じゅぶっ！　ぐじゅぶぶぶっ！

「う、うわっ！　す、スゴイッ！　か、絡みつく。あ、暖かくて、柔らかいのが、ボクに絡みついてきます！」

肉棒が膣道を押し広げていく。絡みつく襞がペニスを包む皮を引っ掛け、膣内で赤い肉亀頭を剥き出しにしていった。

「ど、どう？　分かる？　あ、貴方の包茎が剥けていくのが。ど、童貞がなくなっていくのが？　き、気持ちいいでしょ？　私も、私も気持ちいいわ」

（す、凄い硬いっ！　そ、それに熱いっ！　び、ビクビクって、膣中でびくびくって動いてるっ！　ひ、久しぶりだから。セックスするの久しぶりだから凄く感じる！）

こんなに自分は感じ易かっただろうか？　などという疑問を覚えてしまう程、肉棒の味は涼子に愉悦を覚えさせた。キュッキュッと蠢く肉襞がペニスを押し潰す。

「うあっ！　ぬ、ぬめぬめして、し、搾り出される！　も、もうっ！　もう射精（だし）ちゃいます！　あ、駄目だっ！」

経験のない少年に耐えられるような刺激ではなかった。

（も、もう射精？　私はまだ……いえ、この子は初めてなんだから。だから……）

少年はあっさりと快楽に負け、ドビュッドビュッドビュッと精液を女捜査官の膣中に撃ち放つ。唐突な射精によって広がる熱気。下腹部にじんわりと広がる子種の感触に、一瞬涼子の意識も飛びそうになった。

「んあっ！　で、射精てるっ！　ど、童貞の熱い精液が膣中に射精てるっ！　んっくふっ！　はぁっはぁっはぁああああ……」
ヒクヒクと震える腰。うっとりと瞳が細まる。膣壁越しに伝わってくるペニスの痙攣が、そのまま女捜査官に肉悦を与えていた。
「ず、随分早いわね。勿体無い。でも、初めてなら仕方ないわ。ふふ、つ、次からは頑張りなさい」
やがて射精を終えた肉棒をジュズッと引き抜く。ペニスが抜けると膣口に溜まった白濁液が、ポタポタと流れ落ちた。
勿論授業はこれで終わりではない。女捜査官は次の獲物に視線を向ける。
「じゃあ次は貴方ね」
立ったままティッシュで自身の蜜壺を拭った後、次の少年に伸し掛かる。先程と同じ騎乗位の体勢。ジュズズッと膣中に肉棒が入り込む。
「いい……で、できるだけ。が、我慢するのよ」
「は、はい」
女捜査官は妖艶に微笑みつつ、少年に命令し、自ら腰を振り始めた。
じゅぽっじゅぽっじゅぽっ！
「んくっ！　わ、分かる？　あ、貴方のペニスは私の、し、子宮口にあ、当たってるのが？　ひっひっひんんっ！　こ、ここが、あ、赤ちゃんのできる場所よっ！　んひっ！」

膣奥まで入り込んでくる肉棒に、子宮口でキスをする。時折円を描くように腰を振り、キュッキュッと膣道でペニスを締め上げた。それでも少年は命令を忠実に守り、必死に射精感に堪え続ける。

（凄く射精したそう。私のマンコの中でペニスが硬くなってる。熱くて、気持ちいい）

苦しむ少年の姿を見るのが気持ちよかった。はぁはぁと彼の口から漏れる吐息を耳にするたび、涼子の肉感も高まっていく。膣奥で肉棒の痙攣を受け止めるたび、女としての情欲が膨れ上がっていった。

（ほ、欲しい。セーシ欲しい。わ、私の膣中に精液を流し込んで欲しい）

ギュッギュッと足の指を握り締める。伸ばした手で少年の掌を握りながら、女を犯す男のように腰を振りたくった。パンパンパンッと腰を打ち付ける音が響き渡る。

「あっ！　も、もう駄目ですっ！」

少年が流石に限界を告げてきた。

「ま、だ、まだだっめ、も、もうすこっし、が、我慢しっなさいぃいいっ！」

まだ早い。今射精されてはまだイケない。だから女捜査官は少年を止める。これに少年は「はい、はいっ！　我慢しますっ！」と辛そうながらも何度も頷いた。だから女捜査官は安心して更に激しく腰を動かす。クイックイッとリズミカルに細いウェストを何度も左右に振った。動かすたびに肉茎が胎内で震えるのが分かる。そのたびに肉壁が震え、愉悦が全身に広がった。刻み込まれる快楽に、更に女捜査官は腰の動きを激しくするが――

「あ、だ、だめっだ。で、射精るっ！」
その動きに先程まで童貞だった少年が耐えられる筈もなく。
どびゅぼっ！　びゅぼっびゅぼっびゅぼっびゅぼぼぼぉっ！
「あ⁉　あ――⁉　で、射精ってる！　あっあっあっあ――あ――っ！　まっだ、まだだっめってあっ！　あつっ！　膣中あつっ！　あづくてっ！　ひっひっひ――」
ポンプのように吐き出される白濁液が、子宮を満たし、膣中を埋め尽くしていった。唐突すぎる射精に、油断していた涼子の肉欲は、一瞬で限界まで昇り詰めていった。官能の波が理性を押し流していく。見開かれる瞳。全身が激しく痙攣し――
「イッくのっ！　イッくのぉっ！　んひーひーっ！　気持ちいいっ！　きもひいいっ！」
相手が少年だということも忘れて達する。溢れ出す愛液が、少年の下腹部を妖しく濡らした。絡み合う粘液が糸を引く。最早肉体は止まらない。暫くの間女捜査官は嬌声を上げ続けた。
「あ、あぁあああ……はぁはぁはぁ……す、凄く沢山出たわね」
肉棒を引き抜いた後、少年達の前で膣内の精液を指で掻き出して見せた。指と膣口の間に扇情的な糸が伸びる。
「せ、先生！　も、もう我慢できません」
これを見た残りの少年達が声を上げる。そんな姿に涼子は優しく微笑んだ。
「大丈夫よ。わ、私に任せなさい……」

『第六章　洗脳終了』より

彼は笑っている。だというのに、出てくる言葉は涼子にとって絶望的なもの……。
「ち、ちがうっ！　せ、洗脳……洗脳なんかされないっ！　私は洗脳なんかされてないっ！　やめ、やめさせろっ！　こんなのやめさせろおっ！　嘘をつくなっ！」
現状を認識できない。認識したくなかった。だから否定の言葉を吐き続ける。
「嘘か。クク、嘘ならよかったのになぁ。でも、嘘――じゃなーい！　お前だってそれは分かってるんだろ？　ほら、覚えてるだろ？　ここの連中に自分からマンコ開いてきたことをよぉ。なぁ？　なぁなぁなぁなぁ？」
歓喜を隠しきれないといった様子で、成川が顔を近づけて来る。息が届くほどの距離。思わず涼子は顔を背けた。
「し、してない……わ、私は……私はそんなこと……そんな……」
否定しても、身体から力が抜けていく。自分が洗脳されていたという事実を消し去ることができない。それでも敵の言葉をそのまま認めるわけにはいかなかった。
「こん、こんなこっとして、た、ただで、すむ、すむとおもってるっの！　んひっ！　んご、んごかないでぇっ！」
この間も犬がピストンを続ける。腰が叩きつけられるたび走る性感によって、涼子の意識はともすれば切れてしまいそうだった。それを必死に繋ぎ止める。
「お、お前を、も、もう一度、もう一度た、逮捕しって、やる！　お、お前のつ、罪を白日にさらしてやっるぅ！」

敵に屈服することは許されない。どんなに最低で最悪な状況でも、涼子は一歩も引く気はなかった。

「そ、そうだ！　か、必ず、必ず後悔させてやるっ！」

これに沙紀も同調する。二人の女捜査官の敵意が剥き出しとなっていた。だが、そんな程度で成川は揺らがない。それどころか、より表情に強い歓喜を浮かべる。

「後悔。後悔ねぇ。クク、させて欲しいものだ。でもいいのか？　そんなことをすれば、お前ら自身の痴態も、白日の下に晒すことになるんだぞ！」

「し、してないっ！　痴態なんか見せてないっ！　私は洗脳なんかされてないっ！　こんなことしてただで済むと思うなっ！　ご、強姦罪でお前の罪は更に重くなるんだぞっ！」

「……強姦罪ねぇ。立証できるのか？　だってお前らは喜んで腰を振っていたんだぞ。ちゃ～んと、証拠は残っているんだからな。クク、おかしいとは思わなかったか？　何故お前はこれを自分で確認しようと思わなかった？」

笑いながら成川が一枚のディスクを取り出す。

「――あ――」

それは涼子が用意したものだった。自分の知らないところで事件が起きた場合を想定して用意したもの。成川が洗脳をしていたという証拠を得る為に準備したもの。

「ご苦労なこった。この収容施設中に隠しカメラをセットしているんだもんな。それも、そこにいる檜山と二人で。大変だっただろ？　しかし滑稽だな。この程度のことに俺が気

づかないとでも思ったか？」
　涼子の切り札。それは隠しカメラによる映像だった。手法としてはあまりに単純なものだが、それ故に盲点になると踏んで、用意したのである。水斗にすら黙って。
「な、何で？　何で貴方がそれを持ってるの？」
　だから敵の手に映像を焼き付けたディスクがあるのが信じられなかった。
「何でって……簡単なことだ。お前のことだから、絶対何か奥の手を用意してると思ってな、お前自身に聞いたんだよ。何かないかって。そしたらどうだ、親切に教えてくれたよ。監視カメラのことをな」
　言いながら成川は室内に初めから用意されていたプロジェクターにディスクを入れた。スクリーンに映像が映し出される。
「最後のこの瞬間の為に、映像を見ないようにと余計な催眠までかけたんだ。さあよく見ろ。よかったな。自分で自分の痴態の証拠を残せてさ」
　隠しカメラに映るのは映像だけ。音声はない。それでも鮮明な映像から、口の動きを読み取れば、成川が何を言っているのか分かる。だからこそ催眠の証拠になる。そう涼子は踏んでいた。
　だが、映像に成川は映っていない。スクリーンに見えるのは——
「い、いやっ！　いやぁぁぁああ

あああああああああああああっ！」

涼子が絶叫を上げる。

スクリーンに映し出されたのは、男達の肉棒を口に含み、自ら囚人達に身体を開く自分自身の姿だった。男に跨り、積極的に腰を振り、情欲に溺れた表情を浮かべる自分自身。娼婦のように淫らで、醜い姿。正視するのも堪え難い。

『きもひいいっ！　ちんぽいいっ！　ちんぽぉっ！』

娼婦のような衣装で、子供に跨り、快楽を貪る姿――

「あ、あああっ！　み、見せるなっ！　こんなの見せるなぁっ！」

映像には沙紀の姿も映し出される。自分自身で胸を搾りながら、男達の前で四つん這いになり犯されていた。男達を罵るような表情を浮かべながらも、自ら積極的に腰を振っている。男を汚いものだと憎む沙紀にとっては、最も見たくない自分自身の姿だった。

「違うっ！　こんなの違うっ！　違うのっ！　見ないでっ！　見ないでよっ！　お、お願い！　見ないでぇっ！　助けて、助けて水斗ぉっ！」

涼子は泣きじゃくる。冷静でどんな相手にも一歩も引かない捜査官の面影を、そこから覗き見ることはできなかった。犬に犯されたまま、幼馴染に救いを求める。

「ちがうのっ！　こんなのは嘘っ！　嘘なのよぉっ！　ちがうちがうちがうちがうっ！　こんなの私じゃないっ！　私じゃないのぉっ！」

泣き喚く姿はまるで子供のようだった。涙と鼻水で顔がグシャグシャに汚れる。

「いやっ！　うえええっ！　ひっ、ひぐっ。ぐすっ……うそ、うしょよぉ……」
「ククッ！　それだ。それが見たかったんだ。ククッ！　この瞬間の為だけに、お前等を島に呼び寄せたんだからな。この顔を見る為だけに、わざわざ種明かしまでしたんだ！　よかったなぁ！　正気に戻れてさあっ！　見ろよ。この最低な姿！」
成川は歓喜を隠そうともしない。スクリーンと涼子達の姿を交互に見つめ、何度も手を叩く。そんな彼の言葉に、この場にいる看守達も「まったくだ。本当に最悪だ」などと言って大いに賛同した。その中には――
「助けてくれじゃないだろ。あ～あ、幻滅だよ。正直さ、俺って涼子のこと昔から好きだったんだよね。でもさ、こんな姿見せられたら、百年の恋も冷めるってのの。まさか涼子がこんなに淫乱だったなんてな」
水斗が蔑みの視線を向けてくる。涼子にとっては最も向けられたくない視線だった。
「ちが、違うのっ！　違うのぉっ！　い、淫乱なんかじゃないっ！　私は違うっ！」
否定をしたところで、誰も信じてはくれない。
「違うか。本当にそうかな？　まあ、そんなのは実際に確かめてみればすぐに分かることだ。だろ？　なぁ皆さん」
淫乱かどうかを確かめる術は簡単なことだ。看守達は成川の言葉にニヤニヤ笑いながら頷いた。

＊

「んぶっ！　ぶふほっ！　おぼぉっ！」
涼子の口には肉棒が突き入れられる。それも一本ではなく、二本のペニスが同時に。
（く、口が裂けるっ！　口が裂けちゃうよぉっ！）
ずごっずごっと容赦なく口腔を肉先が突く。唇が捲れ上がるという情けない表情が晒される。それでも抵抗することさえできない。四つん這いの姿勢を取らされたまま、膣内にも肉棒を挿し込まれ、がっちりと腰を押さえられていた。女の力ではこの拘束を振りきることはできない。
「んぶおっ！　んごっいっでる！　な、なふぁでち、ちんふぉうごいでっ――おこぉっ！　んげっ！　げろぉっ！」
バシンバシンッと腰と腰が激しくぶつかり合う。そのたびに身体が前方に押し出され、口腔の肉棒を更に喉奥まで飲み込まされる結果となってしまった。食道を刺し貫かれ、胃の中から生温かいものが湧き上がってくる。しかし、口は塞がれているので吐くこともできない。結果、鼻の穴から汚汁が噴き出した。
「んぶえっ！　く、くしゃいぃっ！」
酸味を帯びた匂いが広がる。
「おいおい汚いなぁ。しょうがない。ちょっとは俺達の洗浄液で綺麗にしてやるか」
「お、そりゃいいな。よし、やってやるか」
この様を見てゲラゲラ笑いながら、口腔陵辱を行なう男達がピストン速度を上げる。

ぼじゅっぼじゅっぼじゅっぼじゅっぼじゅっぼじゅっ！

「こほっ！　ほごっほごっほごっ！　おぉおおおっ！」

（お、おっき、おっきくなってる！　わ、私のく、口の中で、口の中でっ！　んんんっ！　く、口がこわ、これっる――んあああっ！）

内側から頬が膨れた。亀頭の丸みを帯びた形が艶かしい。喉奥を突かれるたびに、瞳は半分白目を剥き、唾液が溢れた。それでも男達は腰を止めることはなく、やがて――

びゅぐぐっ！　じゅびゅぐっ！　びゅぶぐぼぉっ！

「んぶぇええっ！　ぶぶえっ！　ぶげぇえっ！」

多量の白濁液が口腔内に撃ち放たれた。最早女のものとも思えない、くぐもった獣のような悲鳴が上がる。ドクドクとポンプのように肉棒が痙攣するたび、口腔に生臭い牡汁が流れ込んできた。

「うあっ！　最高だ。よし、バトンタッチ！」

射精を終えると、すぐに男達はペニスを引き抜く。解放される口腔。涼子は流し込まれたものを吐き出そうとする。が、その間すら男達は与えてくれなかった。間髪入れずに次の肉棒が口腔に挿し込まれる。精液が肉棒の圧力で口角から溢れ出す。

「ぶんぶっ！　んぶっ！　ち、お、おぼれっる！　せい、ぜーしでおぼれ――んげぇっ！」

濃厚汁が喉奥に絡まった状態ではまともに息をすることもできない。だから救いを求めるのだが、この場に慈悲を持ち合わせる者はいなかった。

再び始まるピストンと、新たな射精。射精が終わると、次の肉棒が口腔に挿し込まれる。苦しみのあまり、精液を飲み干すこともできない。塞がれた口では当然吐き出すこともできなかった。

（く、苦しい。苦しいよ……精子で溺れし、死んじゃう。な、なのに……はぁはぁ、なのに、ど、どうして、どうしてきも、ぎもぢいいの？）

島に着いてから刻み込まれた陵辱の痕が、苦しみさえも愉悦に変える。口腔に広がる苦味と熱気、吐き気を覚えさせる臭みさえも、どこかで心地好く感じてしまっていた。それが如実に身体の動きにも現れてしまう。

自然と腰を動かし、ペニスに舌を絡めていた。

そんな涼子と同時に、沙紀も男達から陵辱を受ける。沙紀は自分を囲む男達のペニスに、タンクトップを捲り上げた状態で、自らの乳房で奉仕を行なっていた。

「パイズリしろよ」

あまりに単純な命令。

（わ、私がどうしてそんな命令を……でも、でも何で？　何でだ？）

覚え込まされた射精の味を忘れられない。逆らう気力すら奪われていた。身体が動き出し、男に奉仕することになってしまう。

「む、胸の、胸の間にあ、熱いのが、や、火傷しそう――く、くそっ！　き、汚いものをおったててるんじゃねぇっ！　く、くせーんだよっ！」

そんな自分が情けない。口汚く敵を罵ることで沙紀は何とか自分の心の平穏を保とうとしているようだった。が、どれだけ男達を拒絶しても、身体は積極的に奉仕を行なってしまう。それどころか、胸の間に肉棒を挟んでいるだけで、火照った肉体は犯されている時のような情欲を覚えてしまっていた。性感さえも、術によって高められてしまっている。

「あっあっあっあっあっ！　く、クソッ！　こ、こんなこと、こんな屈辱っ！　こ、殺してやるっ！　お前等全員――んんんん――こ、殺してやっる！」

「おいおい、殺すとは穏やかじゃないなあ。お前一応潜入捜査官なんだろ？　だったら法律は守らなくちゃ駄目だぞ。ほら、これでも受けて少しは心を静めろ！」

どびゅぶっ！　びゅぶばあっ！

言葉と共に胸の間に挟まった肉棒から、白濁液が撃ち放たれる。谷間の中で行なわれた射精。乳房と乳房の間から、精液が溢れ出して来た。熱液が胸元に広がっていく。ぎゅっと詰まった熱液が、沙紀の肉体を一瞬で高みに押し上げていった。

「んあああっ！　で、射精てる！　わ、私のお、おっぱいの中で、汚い液が出てるっ！　あ、熱いっ！　熱くて、や、火傷するっ！　臭い！　臭いんだよっ！　臭いのに、殺したいのに！　イッく！　私イッちゃう！」

膣内射精を受けたわけではない。ただ肌の上に男の汁をかけられただけだというのに、沙紀の身体はあっさりと絶頂を迎えてしまう。

肢体を震わせながら、またも失禁を始めてしまう潜入捜査官。床に密着した尻に生温か

い感触が伝わってくる。それがより屈辱感を高めていった。
「うはは、かけられただけでイくのかよ。やっぱ最低だな。ほらほら、どんどんイけよ」
その屈辱も、男達にとっては酒の肴でしかない。喜んだ男達が全身に肉棒を擦り付けてきた。二の腕で、髪で、頬で、凸で、指先で、谷間で、乳房で、脇で、膝で、足の裏で、有りと有らゆる場所に熱棒が押し付けられる。そのまま腰を振り始める男達。
「んきあっ！　うご、動くなっ！　よ、汚れるっ！　お、お前らの汚いモ……ノで私が汚れるっ！　んあっあっあっ！　だっめ、イクッ！　汚いも、の擦り付けられてるだ……けなのにっ！　とまらないっ！　ばかっ！　ばかばかばかばかばかばかばかっ！　耐えなくちゃ、耐えろっ！　耐えてよぉっ！」
感じてしまう自分の身体がもどかしかった。何度も自分自身を叱咤する。耐えろと言い聞かせ続ける。だというのに、肉体は止まらない。上がり続ける性感を、自分自身でも制御することができなかった。自分の身体が自分のものではないようだった。
肉棒を押し付けられることの心地好さに、沙紀は無意識のうちに身体をくねらせてしまう。ぐじゅっぐじゅっと肉先の粘液が皮膚に染み込むたびに、その表情は性欲にだらけきった情けないものとなった、
「おら射精るぞっ！　たっぷり味わえ！」
びゅじゅばっ！　びゅぐっびゅぐっびゅぐっ！　びゅぶぼぉっ！
限界を迎えた男達は、容赦することなく沙紀の全身に白濁液を振り掛けてくる。まるで

シャワーのように降り注ぐ牡液が、潜入捜査官の肢体を汚し尽くしていった。
「ぐ、グシャグシャだぁ。汚い液で私の身体がグシャグシャになっちゃった……。あっあんんんっ！　や、やだよ。こんなのやなの。やのに……き、気持ちいいのが止まらないよ。た、助けて、たしゅけてぇえええっ！　さいおんじしゃんたしゅけてよぉ……い――イッくっ！　またイッぐっ！　わらひまだいっ――ひんあああああああっ！」
びゅばっ！　ぶしゃぁあああっ！
絶頂と同時に、胸先からは母乳が噴出す。乳房からポタリポタリと床に向かって粘糸を引きながら、ミルクが垂れ流れていった。
「こわひ、こわひんでふ。私、私怖い。気持ちよすぎ、こわいんでしゅ。たしゅけて、たしゅけてくらはい。たしゅけてぇっ！」
しかし、涼子の耳に彼女の言葉は届かない。いや、届いていても聞く余裕など……。
「ごぼっ！　ぶぼごっ！　あ、も……も、もうはい、はいりましぇん……あ、あそこ……わ、わらひのマンコパンパンなんれしゅぅううっ！　んほっんほぉおおおっ！」
男達にも術がかけられているのだろう。彼等の性欲は際限がなかった。取り憑かれたかのように涼子を犯し、膣中に射精を繰り返す。止まることのない性欲を受けた蜜壺は、白濁液によってパンパンに膨れ上がっていた。男が肉棒を引き抜くだけで、膣口からはビュルッと精液が噴出する。その様は排尿をしているかのようですらあった。
（お、お腹の中が熱い……あつ、くて……気持ちよくて、く、苦しい……あ、赤ちゃんで

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/